

タコノ葉細工

タコノ葉細工の起源は 1830 年、つまり小笠原に最初の定住者がやって来た時に遡る。その定住者の多くがハワイ出身で、ハワイ式の編み方を小笠原固有の木であるタコノキの短く堅い葉に応用させたのである。タコノ葉は曲げやすい材質で、職人たちによって帽子、カゴ、箱、サンダルなど多くの日用品が作られた。

1898 年には父島に永島（ながしま）工場が作られ、そこで編まれた商品は東京に輸送されて、高級品としてデパートで販売された。第二次世界大戦中の 1944 年に島から疎開した際に、その伝統的な編物技法の多くが失われたが、現在、様々な団体や個人がその文化を復活させ、失われた技法を再発掘しようと取り組んでいる。母島にあるロース記念館には、現代の職人が再現することが難しい見事なタバコケースなど、この工場で作られた作品が数多く展示されている。体験教室では、シンプルなブレスレットから入れ子箱まで、タコノ葉を使ったありとあらゆるものの作り方を学ぶことができる。